

筑波大学審査学位論文(博士)

論文題目:ノスタルジアが青年期における自己形成に及ぼす影響の検討

人間総合科学研究科心理学専攻

氏名:長峯 聖人

【博士論文概要】

本博士論文の主な目的は、本邦における *nostalgia* の概念整理を行ったうえで、大学生を対象とし、ノスタルジアが自己形成に及ぼす影響について多角的な観点から検討することであった。

その目的を達成するために、まず理論的検討では *nostalgia* に関する基礎的な研究知見および *nostalgia* と自己形成との関連についての研究知見を紹介・整理した。

第1章では、*nostalgia* に関する先行研究の知見について主に説明を行った。第1節では、欧米における *nostalgia* の知見について説明を行った。具体的には、まず *nostalgia* の概念的な起源と歴史の変遷について触れ、*nostalgia* が元来はネガティブな精神病をとして捉えられていたこと、そして近年はその見方が変化し、ポジティブな要素が優勢である *bittersweet* かつ普遍的な感情体験として捉えられることについて説明した。また、トリガーとなる記憶の特徴という観点から *nostalgia* の質的特徴について言及し、*nostalgia* が特定の他者との交流を中心とした個人にとって重要な出来事によって喚起されやすいこと、そしておおむねポジティブに捉えられているもののネガティブに捉えられてしまうケースもあることについて説明した。加えて、*nostalgia* の“*bittersweet*”な側面に関して、代表的な研究例を挙げながら説明を行い、その中心的な特性にはポジティブなものが多く、周辺的な特性にはネガティブなものが多いという知見、そして *nostalgia* が喚起された後にはポジティブ感情とネガティブ感情の両方が喚起されやすいという知見について触れた。さらに、*nostalgia* が主観的・心理的 *well-being* の向上に寄与するという知見について、複数の先行研究を引用しつつ説明した。第2節では、本邦における *nostalgia* の知見について説明を行った。具体的には、本邦において *nostalgia* の邦訳として用いられることの多い懐かしさとノスタルジアについて、先行研究を概観しつつそれぞれの特徴と両者の概念的差異について説明を行った。具体的には、いずれの邦訳も *nostalgia* と類似する特徴を持っていたが、懐かしさはネガティブな程度が弱くポジティブな程度が非常に強いという点において、ノスタルジアは *bittersweet* ではあるもののネガティブな程度が *nostalgia* よりも強いという点において差があるということについて触れた。本博士論文では、懐かしさもノスタルジアもそれぞれ *nostalgia* の異なる側面に言及していると考え、その概念的差異を踏まえたうえで本邦の先行研究（長峯・外山, 2016）で作成されたノスタルジア喚起手続きを修正することとした。

続いて第2章では、本邦で主な従属変数として扱う自己形成について、*nostalgia* との関連を先行研究の知見に基づきつつ説明を行った。最初に、自己形成という概念について、同一視されがちであるアイデンティティ形成との概念的差異を踏まえて説明した。続いて、自尊感情および本来性に関して、その定義に触れたうえで、自己形成における位置づけや *nostalgia* との関連について説明した。さらに、時間的拡張自己の概念について説明したうえで、本博士論文で扱う具体的な下位側面である自己連続性および時間的展望について説明した。自己連続性については、その定義や下位区分（安定性、変化）、*nostalgia* との関連に

について説明したうえで、本博士論文ではそのうち特に変化づけられる自己一出来事関連性に着目することについて述べた。時間的展望についても、その定義や下位区分について説明したうえで、本博士論文では特にその下位側面のうち時間的態度に着目することについて述べた、また、先行研究を踏まえ、時間的展望（態度）の中でも特に未来への展望（態度）に焦点を当てることとした。最後に、アイデンティティ形成について自己形成との関連や *nostalgia* との関連についての先行研究も踏まえつつ説明したうえで、*nostalgia* と自己形成の関連をより精緻に検討することが出来る概念である特性 *nostalgia* を取り上げ、それを測定する尺度である *Southampton Nostalgia Scale* の日本語版を作成する意義について述べた。

第3章では、第2章までの議論を踏まえたうえで本博士論文における4つの具体的な目的を提示した。第1の目的は *nostalgia* を日本語でどのように表すべきかについて整理し、それに基づいてノスタルジア喚起手続きを修正すること、第2の目的はノスタルジアが本来性に及ぼす影響を明らかにすること、第3の目的はノスタルジアが時間的拡張自己に及ぼす影響を明らかにすること、そして第4の目的はノスタルジアがアイデンティティ形成に及ぼす影響を明らかにすることであった。そしてこれら4つの目的を達成するため、第5章および第6章において計7つ（細かな区分まで含めると計9つ）の実証的な検討を行った。

第4章では、第1の目的を達成するための検討を行った。まず研究1では、先行研究における *nostalgia* の邦訳として代表的な「懐かしさ」およびカタカナ語の「ノスタルジア」を取り上げ、それらが実際に *nostalgia* のそれぞれ異なった側面に言及しているかについて検討を行った。その結果、先行研究から得られた示唆と同様、懐かしさとノスタルジアはそれぞれ *nostalgia* と類似した特徴を持っていたが、お互いに言及している側面が異なっていた（懐かしさは子ども時代や特定の期間の出来事、ノスタルジアは情景や離別・死別など）。そのうえで、研究2では参加者に「ノスタルジックに感じる懐かしい出来事」について想起するよう求め、その想起内容の分類を行った。その結果、想起した記憶の分類（3つの側面）において先行研究（Wildschut et al., 2006）とほぼ同様の結果が得られた。これは、従来のノスタルジア研究（長峯・外山, 2016）では得られなかった知見であった。これらの研究の結果、ノスタルジアと懐かしさはそれぞれ *nostalgia* の異なる側面に言及していると考えられた。そのため、従来（長峯・外山, 2016）のノスタルジア喚起手続きを一部修正し、その定義（個人の過去に対する感傷的な思慕）に加え、補足的な説明としてノスタルジアが「ある過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的（センチメンタル）な気持ちになること」であると教示することとした。「ノスタルジア」と「懐かしさ」双方の特徴を捉えたこのノスタルジア喚起手続きにより、本邦でも *nostalgia* と非常に近い感情を喚起させることが可能となったと判断された。そのため、研究2以降では基本的にすべてノスタルジアの語を用いた。

第4章では、第2から第4の目的を達成するための検討を行った。研究3では、第2の目的を達成するための検討を行った。具体的には、ノスタルジアが欧米の先行研究（Baldwin

et al., 2015)と同様に本来性の知覚を高める効果があるのかについて、平時の状況(研究 3-1)と本来性への脅威を与えられた状況(研究 3-2)という2つの状況を設定して検討した。その結果、いずれの状況においてもノスタルジア群の方が日常的記憶群よりも本来性の得点が高いことが示された。これらの結果は、本邦においてもノスタルジアと本来性に関連があるということを実証したと共に、研究 1, 2 を経て修正したノスタルジア喚起手続きの妥当性が高いことを示したという点で意義があると考えられる。研究 4, 5 では、第 3 の目的を達成するための検討を行った。まず研究 4 では、自己連続性の概念のうち「変化」に関わる下位概念である自己-出来事関連性に着目し、ノスタルジアとの関係について検討した。その結果、ノスタルジアを感じる出来事は、自己-出来事関連性が高いと評価されやすいこと、およびそれらの関連において心理的成長感の認知が媒介することが示された。これらの結果は、ノスタルジアを感じる出来事の質的な内容が自己形成を促進するうえでの有用な情報を含むということを実証的に示したものであるといえる。また、研究 5 では、ノスタルジアが喚起されると時間的展望(特に、未来への展望)が肯定的になること、そしてそれらの関連を本来性が媒介することが示された。これは、ノスタルジアは現在への肯定的評価だけでなく未来への志向性を高めるものでもあるという近年の主張(e.g., Sedikides et al., 2018)を支持するものであることに加え、研究 3 で取り上げた本来性の重要性を新たに提示し、かつノスタルジアが自己形成の様々な側面に関してダイナミクス的な影響を及ぼすことを示唆した結果であるといえる。研究 6, 7 では、第 4 の目的を達成するための検討を行った。まず研究 6 では、ノスタルジアがアイデンティティ形成に及ぼす長期的な影響を捉えるために特性ノスタルジアに着目し、特性ノスタルジアを測定する尺度である Southampton Nostalgia Scale (SNS: Routledge et al., 2008) の日本語版を作成したうえで、その信頼性と妥当性を検証した。その結果、SNS 日本語版は高い内的一貫性、再検査信頼性、構成概念妥当性のうち構造的側面の証拠を有すること(研究 6-1)、および構成概念妥当性のうち外的な側面の証拠も有すること(研究 6-2)が示された。そして最後の研究 7 では、縦断的な調査研究を行った。その結果、特性ノスタルジアの高さがアイデンティティ形成の側面のうち特にアイデンティティ探求(広い探求, 深い探求, 反芻的探求)に正の影響を及ぼすことが示された。これらは、ノスタルジアは長期的にアイデンティティ形成、そして自己形成にポジティブな影響をもたらしていることを示唆するものであると共に、ノスタルジアが自己形成に関わる一時的な認知に影響するだけでなく、自己形成に対し自ら働きかけようとする動機づけ的な側面を有していることも実証したものと考えられる。

最後に第 6 章として総合的考察を行った。具体的には、最初に本博士論文の知見についてまとめた後、学術的観点および教育的観点から本博士論文の意義について述べた。最後に、本博士論文における課題と展望について大きく 6 つの観点から整理を行った。